

-大学院歯学独立研究科-
第 85 回 大学院 研究科 発表会 プログラム

大学院学生等が、これまでの研究成果を発表します。
 どなたでも聴講できますので、多数の参加をお待ちしております (聴講申込不要)

場 所：実習館 2 階 総合歯科医学研究所セミナー室

日 時：2019 年 9 月 25 日 (水) 17 時 25 分 開会

—2019 年 9 月 25 日 (水) —

No.	発表区分・予定時間	演題名・発表者	審査委員
	17:25	開会挨拶 山田研究科長	
1	[大学院発表] 17:30~18:00 司会:富田 教授	「第 3 次産業勤労者の口腔保健行動と意識」 志倉 興紀 4 年 健康増進口腔科学講座 口腔健康政策学	主査:羽鳥教授 副査:山下准教授 :荒 講師
2	[大学院発表] 18:00~18:30 司会:宇田川 教授	「マウス破骨細胞の分化・骨吸収機能に対する抗 Siglec-15 抗体の効果」 餅田 愛 4 年 硬組織疾患制御再建学講座 硬組織機能解析学	主査:平岡教授 副査:内田教授 :十川教授
3	[大学院発表] 18:30~19:00 司会:山田 教授	「偏位を伴う骨格性下顎前突者の主機能部位」 深沢 香菜子 4 年 硬組織疾患制御再建学講座 臨床病態評価学	主査:芳澤教授 副査:北川教授 :倉澤教授

発表内容の要旨(課程博士)

Abstract of Presented Research (For the Doctoral Course)

学籍番号 Student ID No.	ID#G 1603	入学年 Entrance Year	2016	年3 Year
氏名 Name in Full	志倉 興紀			
専攻分野 Major Field	健康増進口腔科学 口腔健康政策学			
主指導教員 Chief Academic Advisor	富田 美穂子			
発表会区分 Type of Meeting	中間発表会 ・ 大学院研究科発表会 ・ 松本歯科大学学会 Midterm Meeting / Graduate school research meeting presentation / The Matsumoto Dental University Society			
演題名 / Title of Presentation				
第3次産業勤労者の口腔保健行動と意識				
発表要旨 / Abstract				
<p>【目的】 近年、口腔保健行動の重要性が謳われており、2016年に日本歯科医師会が実施した歯科医療に関する一般生活者意識調査から、「定期健診」のために歯科医院を受診する人が増加傾向にあることがわかった。しかし、依然として「自覚症状がある」から歯科医院を受診すると回答する人も多い。そこで、第3次産業勤労者の口腔疾患予防に関する意識調査と口腔保健行動を調べ、今度の啓蒙活動に役立てる事を目的とする。さらに、訪問によるブラッシング指導(TBI: Tooth Brushing Instruction)の効果を検討する。</p> <p>【方法】 第3次産業の勤労者390名(年齢:18-84歳)を対象にアンケート調査(歯科医院に訪れる理由、定期健診の有無と理由、虫歯の有無、ブラッシングの知識・時間・1日の回数、補助具の使用、8020への関心)を行った。アンケート結果より定期健診有群(A群)と無群(B群)に分け、A群/B群を従属変数としたロジスティック回帰分析を用いて定期健診との関連項目を検討した。またB群の22名をTBI実施群(C群:11名)、TBI無群(D群:11名)に分け、検者が会社に出向きC群にTBIを毎回実施し、各群4回(2年間)のPCR(Plaque Control Record)を調べTBIの効果を検討した。各群内で初回と各回のPCRの変化率をWilcoxon符号付き順位検定で比較、TBIの効果を検討した。2群間の比較は、Mann-Whitney検定を用いた。</p> <p>【結果】 アンケートよりA群は115名、B群は273名であり、定期健診をしない理由は「時間が無い」が多かった。ロジスティック回帰分析では、定期健診をしていることは、男性(オッズ比0.440)、虫歯がない(オッズ比2.642)、ブラッシング方法の知識(オッズ比3.186)、歯間ブラシの使用(オッズ比2.231)、フロスの使用(オッズ比1.834)と有意な関連が認められた。業種・年齢・歯ブラシの回数・時間・8020を目指している、との間には有意な関連は認められなかった。TBIの効果では、C群は初回に対して2回目(p<0.05)3、4回目(p<0.01)はPCR値が有意に低下した。D群でも初回に対して3回目(p<0.05)4回目(p<0.01)はPCR値が有意に低下したが、減少率はC群の方が高かった。</p> <p>【考察】 アンケートの結果から、定期健診の有無は、業種や年齢に関わらず、口腔保健に関する個人の知識が強く関与していることが示唆された。しかし、これらの人は8020を目指しているわけではなく、生活の一部として口腔内のケアをしていると考えられた。また、会社で実施されたTBIの有無に関わらずPCRに効果があることから、これらは検査をするという行為が影響を与えたと考えられる。今後、定期健診を受けていない男性の意識を強化するとともに、時間がなくて定期健診を受けられない人に対して、訪問指導をする等の歯科医師の能動的なアプローチも重要だと示唆された。</p>				

発表内容の要旨(課程博士)
Abstract of Presented Research (For the Doctoral Course)

学籍番号 Student ID No.	ID#G 1607	入学年 Entrance Year	2016	年 Year
(ふりがな)	もちだ あい			
氏名 Name in Full	餅田 愛			
専攻分野 Major Field	硬組織疾患制御再建学講座 硬組織機能解析学			
主指導教員 Chief Academic Advisor	宇田川信之			
発表会区分 Type of Meeting	中間発表会 ・ 大学院研究科発表会 ・ 松本歯科大学学会 Midterm Meeting / Graduate school research meeting presentation / The Matsumoto Dental University Society			
演題名 / Title of Presentation				
マウス破骨細胞の分化・骨吸収機能に対する抗 Siglec-15 抗体の効果				
発表要旨 / Abstract				
<p>【目的】 破骨細胞では、ITAM モチーフ含有分子の中では DAP12 と FcRγ の発現が高く、ダブル欠損マウスは大理石骨病を呈する。DAP12 と会合して、破骨細胞の分化に伴って特異的に発現が上昇する免疫グロブリンスーパーファミリー分子として、シアル酸受容体タンパク質 Siglec-15 が同定された。今回、Siglec-15 中和抗体の効果について、マウス由来の細胞培養系において検討した。</p> <p>【方法と結果】</p> <p>(1) Siglec-15 抗体は、骨芽細胞と骨髄細胞の共存培養系で形成された破骨細胞のアクチンリング形成および象牙質切片上の吸収窩形成を濃度依存的に阻害した。</p> <p>(2) 骨髄細胞培養系に RANKL と M-CSF を添加し破骨細胞が誘導される条件で、Siglec-15 抗体は TRAP 陽性の多核破骨細胞の分化を阻害した。一方、アルカリホスファターゼ陽性の骨芽細胞が多数誘導された。この時、多核破骨細胞形成は完全に抑制されたが、単核 TRAP 陽性前破骨細胞の存在が認められた。</p> <p>(3) 骨芽細胞と骨髄細胞の共存培養系で RANK 陽性の破骨細胞前駆細胞(qOP)が出現する。Siglec-15 抗体は qOP の形成に対しては抑制効果を示さなかった。</p> <p>(4) 破骨細胞由来の LIF がスクレロスチン抑制を介して、骨形成を促進させるカップリング因子である可能性を見出した。Siglec-15 抗体で処理した破骨細胞においてカテプシン K および RANK の発現維持と同様に、LIF 発現も維持されていた。</p> <p>【結論】 Siglec-15 抗体は多核破骨細胞の分化と骨吸収機能を阻害すると共に骨芽細胞の分化を促進すると考えられる。</p>				

発表内容の要旨(課程博士)
Abstract of Presented Research (For the Doctoral Course)

学籍番号 Student ID No.	ID#G 1605	入学年 Entrance Year	4	年 Year
氏名 Name in Full	深沢 香菜子			
専攻分野 Major Field	臨床病態評価学			
主指導教員 Chief Academic Advisor	山田 一尋			
発表会区分 Type of Meeting	中間発表会 ・ 大学院研究科発表会 ・ 松本歯科大学学会 Midterm Meeting / Graduate school research meeting presentation / The Matsumoto Dental University Society			
演題名 / Title of Presentation				
偏位を伴う骨格性下顎前突者の主機能部位 A study of main occluding area in subjects with mandibular protrusion and deviation				
発表要旨 / Abstract				
<p>【目的】食物の粉碎は機能咬頭間の限局された部位で行われ、主機能部位とよばれている。骨格性下顎前突者の主機能部位は、正常咬合に比べ下顎歯列の後方でみられることが示されているが、下顎骨の水平方向の偏位による主機能部位の検討は行われていない。そこで、本研究では偏位を伴う骨格性下顎前突者の主機能部位について検討した。</p> <p>【資料および方法】松本歯科大学病院育成期口腔診療部門に来院した偏位を伴う骨格性下顎前突者 13名(平均年齢 20.1 歳)を対象とした。主機能部位検査の 10 回の施行のうち、先に 5 回に達した方を習慣性咀嚼側とした。習慣性咀嚼側と下顎骨の偏位側が一致した 8 名(一致群)と、習慣性咀嚼側が下顎骨の偏位側と一致しなかった 5 名(不一致群)の 2 群に分類した。ストップングを位置づけした歯列模型を 3D 入出力装置にて 3 次元化し、その後 3 次元解析を行い、上下顎骨の主機能部位の座標と第一大臼歯の咬頭傾斜角を解析した。</p> <p>【結果および考察】一致群は偏位側側方歯に連続した交叉咬合が 7 名、非偏位側側方歯に連続した缺状咬合が 1 名にみられた。不一致群の側方歯は、両側交叉咬合 1 名、交叉咬合なし 4 名であった。主機能部位の座標解析では、一致群では、上顎水平方向では偏位側が非偏位側に比べ有意に頬側に位置し、下顎では偏位側が非偏位側に比べ有意に舌側に位置した。一方、不一致群の主機能部位の座標解析では、上下顎骨の偏位側と非偏位側の比較で有意差はなかった。咬頭傾斜角の解析では、一致群では偏位側の上顎第一大臼歯の咬頭傾斜が、非偏位側に比べ有意に頬側に傾斜し、偏位側の下顎第一大臼歯の咬頭傾斜角が、非偏位側に比べて有意に舌側に傾斜していた。不一致群の上下顎骨の第一大臼歯の咬頭傾斜角は、偏位側と非偏位側で有意差はみられなかった。</p> <p>【結論】偏位を伴う骨格性下顎前突者の主機能部位の位置は、側方歯の咬合状態と第一大臼歯の咬頭傾斜角に関連することが示された。</p>				